

の課題としては、浮世草子から読本へと移行していく過渡期の作品がどういった方向へ動いていったのか、その辺りをもっと考えて行く必要があると考ええる。

(凡例) 本文引用は以下の通り。

木越治「多満寸太礼」「和漢乗合船」『叢書江戸文庫34 浮世草子怪談集』(国書刊行会)

武田晃・小塚由博・千石知子『中国古典小説選8 剪燈新話』(明治書院)

架蔵本『寂照堂谷響続集』(元禄五年版)

(付記) 本稿は第四五回解釈学会第四五回全国大会(平成二五年八月二〇日 於花園大学)においての口頭発表を基に加筆修正を加えたものである。当日御教示賜った先生方に深謝致します。

## 註

- (1) 佐藤深雪「飛騨匠物語典拠私考」『日本文学』第26巻第10号(日本文学協会) 一九七七年一〇月
- 篠原進「青い聖痕の神話―浮世草子『和漢乗合船』の位置」『青山語文』第41号(青山学院大学日本文学会) 二〇一一年三月
- (2) 拙稿「和漢乗合船典拠考」『日本文学』第68巻第3号(日本文学協会) 二〇一三年
- (3) 木越治校訂『叢書江戸文庫34 浮世草子怪談集』解説
- (4) (3)に同じ。
- (5) (2)に同じ。63ページの表より抜粋した。
- (6) 木越治「玉すだれをめぐって」『日本文学』第31巻第7号(日本文学協会) 一九八二年
- (7) 朴蓮淑「『多満寸太礼』と『新語園』」『日本文学』第48巻第12号(日本文学) 一九九九年

- (8) 新井白石『折たく柴の記』(岩波文庫)
- (9) 李進熙「江戸時代の朝鮮通信使」一九九二年八月(講談社学術文庫)
- (10) 杉下元明「俗文藝と通信使」『前近代における東アジア三国の文化交流と表象(国際シンポジウム)』(国際日本文化研究センター) 二〇一一年三月
- (11) 佐藤深雪「二世の縁」論『日本文学』第28巻第2号(日本文学協会) 一九七九年
- (12) 篠原進「青い聖痕の神話―浮世草子『和漢乗合船』の位置」第41号(青山学院大学日本文学会) 二〇一一年三月

## 『和漢乗合船』創作過程についての一考察

そして全体を見通した際、あたかも日本のどこかの説話を読んでいるかと思わせつつ、朝鮮の話も続けて読ませることによって、二つの国を比較させる、といった構成で仕上がっているわけである。

日本の話では、今川義元・氏真、夷隅主膳など戦国時代の実在の人物を登場させているところから、実はこの話は軍記物か何かの焼き直しではないかとも考えた。落月堂操扨は『楠一生記』などの軍記作品を記しているからである。しかしその点は未だ不明であり、今のところは操扨の創作と考えた方がよさそうである。

このように考えると、『乗合船』が創作された過程は、後半部分の漢籍を原拠とした話をふまえ、それを日本の物語として脱化し、話を構築していったという順序を経ていると考えられよう。つまりこの漢籍こそが、操扨の創作の原動力となったと言えるのではないか。それは『谷響集』『続集』のみならず、『剪燈新話』の場合も同様である。先にあげた「愛卿伝」の話は上田秋成の「浅茅が宿」との関係が指摘されているが、この話も夫のもとに死んだ妻の魂が尋ね、夫はそれと知らず契りを結ぶ・といった趣向は『剪燈新話』から影響を受け、そこから操扨が創作したと考えられる。ここでもやはり『剪燈新話』が創作の原動力となり、新たな物語を生み出すことができたのである。ではなぜ、「賀陽良藤」をモチーフにした朝鮮が舞台となる話「色道一遍巴友 本心試老婆 穴中住居」だけはなぜ原拠となる話を和訳するだけに止めず、「脱化」したのであるか。その理由も先ほどから述べている「時代性を取り入れる」ことではないか。徹底的に朝鮮通信使を意識し、狐のままでもなく狸にかえ、外国である朝鮮のイメージを強く印象づけようとしたのではないだろうか。それには「賀陽良藤」の逸話を換骨奪胎することが必要であったのではないか。『多満寸太礼』が出版された頃は通信使の往来はなく、『乗合船』は通信使再開時期である。同時代の浮世草子とは一線を画そうと新しさを追求した

創意工夫の結果生まれた作品といってもよいのではないか。

## まとめ

本稿では、『乗合船』の創作過程について一考した。日本の話を先に設定して漢籍から似た話を探したのではなく、逆に朝鮮の話の原拠となった漢籍から影響を受けて、同じ趣向の日本の話を創作する、といった順序を経ていると思われる。そして、創作するにあたり、巻四の一方で利用した話のように、朝鮮通信使が語る形式として辻褄が合うよう時代性を考慮するといった作者の意図があったのではないか。朝鮮の話も、『谷響集』『続集』『剪燈新話』等の漢籍に書かれた話を基盤とし、改めて日本の話を構築していくといった創作過程をふまえて考えてよいだろう。

宝永・正徳頃の浮世草子は八文字屋本が勢力を持っていたが、それ以外にも『乗合船』のように小さな版元から出版されていた作品はたくさんある。怪談のような作品から実録体の小説、時代物など、ジャンルは様々である。この後読本形式の作品群へと移行していくが、読本が「中国白話」を趣向としていたところに特徴の一つがあるとすれば、『乗合船』などは翻案の最たるものであり、篠原進の言葉を借りれば

歴史小説的な側面を有する読本の世界がここに先取りされているのだ。・翻案という装置が彼の力を誇大に見せていたのである。ただ、結果的にせよそれが読本を先取りしたごとき文体や構想を備えていたことは間違いない。<sup>10)</sup>

のである。

落月堂操扨が漢籍を原動力に作品を生み出し、工夫を凝らしたことが、後の上田秋成などに何らかの影響を与えていたとしたら、この時期の浮世草子作品の位置付けがもう少し変化しそうである。これから

世草子でも異なる描き方がされていることが分かる。ここには作者の創意も含まれているのではないかと考えてもよいだろう。そしてこの二つの話の大きな違いとしては、「時代性」という点が指摘できるのではないだろうか。特に『乗合船』における「朝鮮通信使」の設定は無視できない。次にその点について述べていく。

#### 四 『和漢乗合船』の時代性―「朝鮮通信使」との関わり

先に『多満寸太礼』との相違は時代性であると述べたが、『乗合船』巻四の一の日本を舞台にした話の中に、次のような場面がある。

・此上は法師となし、せめて未来をたすくべし」と清見寺にて出家せさせ、専澄法師と名をあらため、「仏果の縁ともなれかし」とて、薩埵山の麓に小庵を結び、入れ置きたり。……発明の段は及びもなし。なをく墮馬鬚増し、鬱気の頂上となりしぞや。此上は薩埵山にのぼり、狸穴をさがして其古狸をめを打殺し、此あたを報ぜん。……

愚鈍の長男が出家をする寺とその場所が「清見寺」で、「薩埵山」の麓に暮らす、とある。この「清見寺」こそ当時の朝鮮通信使が立ち寄った寺であり、薩埵峠は通信使一行が実際に通った所なのである。

『乗合船』が書かれた時期は正徳三年。朝鮮通信使の往来が再開されたのは正徳元年である。新井白石「折りたく柴の記」でも記しているように日本は国をもって朝鮮通信使を迎え入れ、また一般民衆もその行列に目を見張ったという。『乗合船』は「通信使」熱の冷めぬ時期に書かれて出版されたわけであるから、その時代をかなり意識していたと考えてよいだろう。また語り手に李東郭という実在の人物を設定するというところから、かなりのリアリティを追求したのではないだろうか。

李東郭は通信使の製述官として正徳元年に来日していることが分

かっている。また前回には清見寺には訪ねなかつた通信使一行も、正徳元年には清見寺の芝岸治霊和尚と漢詩を唱酬しているという。杉下元明はこの李東郭の知名度については次のように述べる<sup>9)</sup>。

・この浮世草子の語り手である「朝鮮の学士李東郭」は実在の人物であった。正徳元年に来日した通信使の製述官である。すなわち国交文書をつかさどると同時に、詩文の応酬につとめた職務であり三位につぐ地位にあった。朝鮮通信使が我が国の儒者たちと詩をやりとりするなど、我が国の文物に多大な影響をおよぼしたことは、周知の事実である。たとえば新井白石の詩集の序文や、祇園南海の『伯玉詩稿』すなわち一夜百首の序文をものしたのが、李東郭であった。……こういった知名度から、正徳の浮世草子にも、語り手として「朝鮮の学士李東郭」が登場するにいたったのであろう。

とあり、また次のようにも指摘する。

(中略) 正徳の通信使においては、新井白石による改革があった。くわえて白石は日本の儒学の力を誇示するために、室鳩巢・祇園南海ら一流の儒者を呼び寄せて、唱和に当たらせた。李東郭という名前が日本に特に強い印象を残したのは、こういった緊張感があつたからこそであろう。……

儒者との関わりの深かつた李東郭を浮世草子の語り手として設定することで、読者の関心を引こうとした点も作者落月堂操扨の創意と考えるべきではないか。

前半の日本の話では設定を全て変え、朝鮮通信使往来のリアリティ(清見寺や薩埵山など)を織り交ぜ、後半の朝鮮の話では、「鷄林の国書」という架空の書名を提示し、登場人物や地名も全て朝鮮の人物名に書き換え、あたかも朝鮮の説話であるかのようなリアリティを追求しながら描き変えているのである。

尊像をきざみ奉るべし」と誓ひて、梅檀の木長七がたけに切てこれを仏壇に建置、普門品を誦し、礼拝祈誓す。さるほどに、十三日を経て、長七其家の藏の下より忽然と出来る。顔色憔悴し、ひとへに黄病をやめるもの、ごとし。(中略)・年月を経て遂に一男を産。利根發明にしてかたちうつくしく、明暮いただきか、へ膝をおろさず、居る事三年にして忽一人の異俗あり。頭に金甲を着し、そのさま四天のごとく也。一つの杖を持、殿中に至る。姫をはじめ、局女房ことごとく逃行たり。又、杖を以わが背中を突。我せばき所よりして出て跡をみれば、まさしく家の藏の下なり」と語る。人々不思議の思ひをなして、則かの藏をこぼちほりてみるに、狐数十疋おどろき走り逃さりぬ。藏の下土の上に長七がいなたる跡あり。わづかに十三日の間をみとせを過すと思へり。藏の板敷の下三四寸の高さを大家高殿と見せつるも、みなこれ妖狐のたぶらかしたる也。誠に、大悲菩薩の靈威いまに始ぬ事ながら、既に狐の穴に死せむとしけるを救はせ給ふ、有難かりしためし也。

傍線部の通り、「賀陽良藤」にみえる観世音菩薩の靈驗譚の片鱗はそのまま忠実に残した説話として創作されているといつてよい。大悲菩薩の靈驗譚として仕上がっている点は『今昔物語集』『元亨釈書』と何も変わらないが、ただ和歌などを挿入している点から雅な貴族文化を髣髴とさせる工夫がみられる。これは『多満寸太礼』全体を通しての作品の特質といえるかもしれない。<sup>7)</sup>

このように、『多満寸太礼』では、靈驗譚としての要素に重点を置いた創作がされていることが分かる。一方『乗合船』巻四では靈驗譚の要素は全く見られず、朝鮮の話として脱化されていた。しかし、巻四の前半部分にもう一つ、日本が舞台となった話がある。「文武二道薨気 附稽古試再拜 古団祈念」である。次に梗概を記す。

今川義元家臣の夷隅周防には息子二人がおり、長男は愚鈍だったの

で名跡は継がせず、清見寺で出家させ、專澄法師と名を改めて薩埵山の麓の小庵で暮らすようになった。ある夜、專澄は見知らぬ武士に大きな城へ連れて行かれた。そこには袴、肩衣をつけた武士が列挙しており、主君らしき者が出てきて、「今から我に仕え、文学・武芸を学んで父周防を喜ばせよ。すぐ還俗せよ。」とすすめ、專澄を夷隅主膳という名に改めさせ、儒学・武芸を習わせた。しばらくすると、主膳は日頃の稽古の成果もあり、鎗の扱い、馬の乗り方など、上手くなった。主君は感心し、急いで父周防に会ってくるようすすめ、主膳は故郷へ帰ることになった。周防の前に現れた主膳(專澄)の様子は、衣も着ず、髪はぼさぼさ。主君に特訓を受けた成果は全く出せなかった。実は見当違いの軍事訓練を行っていたのだった。さらに專澄は主君の名や国の名前も答えられなかった。その様子を見た父周防は息子が薩埵山の古狸に化かされていたと理解し、その狸穴を探しに出たが、もうどこにもなかった。怒り心頭の周防は、たまたま現れた真言僧海順にこの件を相談し、狸を皆殺しするつもりだと告げると、畜類など相手にするなと諫められる。しかし、油断ならないので、加持祈祷するから周防、專澄、海順の三人だけ部屋に籠もり、誰も近づけないようにと指示し、そのまま引きこもった。翌日になっても二人が出てこないために、弟又八が様子を見に襖を開けると、古うちわをつりさげ、周防と專澄は礼拝し、経を唱えていた。海順の姿はどこにも見えなかった。実は海順は狸が化けた偽者で、親子共々化かされていたのだった。

この話は、設定が全て日本の戦国時代に変更され、靈驗譚といった部分は全て消去されている。そして僧侶が登場しても、救う側ではなく、化かす側が変わっている。

このように、同じモチーフ「賀陽良藤」の話を下敷きにそれぞれの作品がどんな話に創作されていくのかを比較してみると、同時代の浮

朝暮抱持未下於膝常念廢長男忠貞立此兒為嫡居三年忽有優婆塞持杖昇殿公主侍女盡逃散又以杖突我背我從隘処出顧視家之倉下也乃毀倉視之有狐數十驚馳倉下土上有坐臥之迹居倉下纔十三日而謂經三歲倉下三四寸而為大夏広殿皆是狐之魅惑也非大悲菩薩威應殆乎狐窟其後無恙十餘年六十一逝

この本文は『元亨釈書』巻第二九から抜粋された文である。「賀陽良藤」の説話は『今昔物語集』「備中の国の賀陽良藤、狐の夫と為りて観音の助けを得たる語 第一七」にも記され、影響を受けた作品は多く存在する。この『乗合船』もその一つではないかと思われる。しかし展開の仕方からみても『今昔物語集』よりも『元亨釈書』に近く、おそらく『続集』に引用された「賀陽良藤」を見ていたと考えられる。このように傍線部分の『乗合船』と『続集』の語彙を比較して見ても明らかのように、そのままの引用は一部であり、「狐」が「古狸」と変更されていたり、地名、国名、日にち、年数などが微妙に変更されていることが分かる。つまり、話の流れ・趣向の大枠は変えずに、人物や状況設定その他は創作し「脱化」しているといえよう。朝鮮の話の部分においてこのような利用法をとっているのは巻四のみである点が興味深い。なぜこの話だけこうした方法をとっているのだろうか。では次に同時代浮世草子作品で「賀陽良藤」の説話を利用していると思われる話との比較からその点を考察する。

### 三．『多満寸太礼』巻七「堀江長七逢狐妖精」との比較

先に述べたように、『乗合船』巻四は「賀陽良藤」をモチーフとして創作された話であったが、『多満寸太礼』という作品の中にも似た話がある。この作品は元禄末から宝永期に書かれた浮世草子で、『乗合船』出版とは十年ほど隔たりはあるが、今回同時代として比較の対象にしてとりあげる。木越治は「……『今昔物語集』巻十六第十七

話「備中賀陽良藤、為狐夫得観音助語」を類話としてあげておく」と述べるが、筋立てからして『元亨釈書』の方が近いように思われる。以下に梗概を記す。

尾張国金山に住む堀江何某長男長七は、器量やさしく、金持ちゆえのんびり育った。妻を迎える年になったある日、長七は姿を消した。部屋には艶書ばかりが残されていた。父母は心配し、ある尊い僧侶に相談すると観世音像をつくるよう薦められ、祈祷していると13日後長七は家の蔵の下から戻ってきた。顔色憔悴して、病気のようにだった。家族が理由を尋ねると、彼は次のように答えた。「妻が欲しいと願っていると、童女から文を渡された。それ以来和歌の往来を続けるうち、そのまま駕籠に乗せられ知らぬ屋形へ連れて行かれた。そこで老婆から姫君を紹介され、一緒に暮らすことになった。年月が経ち、一人息子を設け三年後、一人の四天王のような異俗が殿中に現れ、姫や女房は逃げ惑い、自分は杖で背中を突かれたと思った矢先、気がつけばこの家に戻っていた」とのこと。人々は不思議に思い、蔵の下を掘ると狐が数匹逃げ出した。長七はわずか十三日三年間過ごしていたと思っていた。全ては狐のたぶらかしによるものであった。長七が狐の穴の中で死ぬところを救われたのは大悲菩薩のご加護によるものだった。

この話全体の筋立ては先にあげた『元亨釈書』とほぼ同じである。人物・地名の設定を変えただけで、あとは忠実に原拠をなぞっていることが分かる。よって『乗合船』とも共通する部分がある。最も顕著な違いは最後の「大非菩薩の靈威」という点である。靈威についての本文を抜粋すると以下の通りである。

(略)……に、ある貴き聖の常にこの家に出入しけるを招きよせ、「いかがせん」と語るに、此僧聞て、「人力の及ざる事は仏神をたのみ奉るにしくはなし。年比その人信心あれば、観世音の

とくなる老たる婆かけ出て、己一口に喰んぞと追かくる。こは悲しやと思ひ足にまかせて逃る程に、大家あつて門開けり。此内に逃入て、漸命を助りぬ。美婦出て、様々我をいたわりて後はいはく、『自が父は世をさり給ひて、此家を治むべき人なし。君を見るに、世になみくの人にあらず。幸にこの家をおさめ父の遺跡をつぎてたべ。職禄人にをとるべからず』とて、酒たけなはに及びいえ後、我を輿に誘ひしかば、終夜闇にいりて偕老のちぎりをなす。それよりひるは宴をもふけ、夜はおなじく寝。歎娼はなはだしいして、万事をわする。

其のち一人の男子いできたれり。かたちのうつくしく、愛々しきのみにあらず。生質聡明にして賢々しかりしかば、我これを寵愛すること大かたならず。あけくれいだしきか、へてひぎよりもおろさず。此子成人せば我ちやくしとして国王につかへさせ、福貴にあづかるをみるとおもひ、年月をおくりしところに、大の男の鬚左右にわかれ、まなこは百練のかゝみに血をそ、ぎたるがごとくなるが、従卒数百人相俱して門戸よりこみ入るほどに、家人等是に出むかふて、手おひ討る、者数をしらず。彼男、まつさきにす、んで床にのほり、『汝、順天の安撫使張白敬をかたらひて陰謀をくはだて、王位を奪んと巧めるよし朝廷に聞へ、我討手に向ひたり』とて、剣を以て切付る。我薄手を負ながら奥に逃入ると思ひしかば、杉の本に出たり』と語る。皆人怪んで杉の本に行見るに、少き穴あり。掘穿しかば内より古狸逃出しを、家人等追かけ、終りに打ころして、其穴はうづめたりとかや。此こと吾鶏林の国書に見へたり。杉の大木は今に猶ありとぞ語りき。

梗概は以下の通りである。

「古狸の妖」として、朝鮮の巴友という男がある妻を亡くした後、ある女に心を奪われ、そのまま行方知れずとなる。三十日余り後、

杉の木の根から巴友が戻つて来た。巴友が言う事には、ある夜女と会つていた際、老婆に追い掛けられ、逃げ延びそのまま屋敷にかくまわれた。そこで美しい娘と結婚し、男子をもうけた。この子が成人し、国王に仕えさせて平穩に過ごしていた折、突如王位を奪おうとの陰謀の嫌疑をかけられ、逃げたところ杉の木に出たとのこと。話を聞いた人々が杉の木の穴を掘ってみると、古狸が出てきた。その古狸は殺されたが、杉の木はまだ残っている。

これまで『乗合船』の本文は、必ず参照した書名を明確に記す点が特徴的であったが、この話に関しては書かれていない。本文には「此こと吾鶏林の国書に見へたり」とだけ記され、具体的な書籍名が明示されない点が他話とは一線を画している。よって、『谷響集』『続集』から直接引用されている箇所は指摘できなかった。

しかしながらこの話の筋に近いと思われるものが一つ存在する。それが『続集』巻八「賀陽良藤」である。次に本文をあげる。(返り点・送り仮名は省いた。旧字体は新字体に改めた。)

良藤狐魅雖非夢事状可類夢故引為談元亨釈書寛平中備中人賀陽良藤善貨殖為州之小椽八年秩罷居韋守郷其妻淫奔入京良藤饑居心神狂乱常執筆諷吟書艷詞勢時時尙有兒女之音不見其形似聘媒焉如此數十日一朝失所在孥家尋求遂無得其兄弟悉豪富皆會其家悲嘆懊惱合族發願曰若得骸当刻十一面觀世音像即伐栢木等良藤長誓祈歷十三日自其宅倉下出來顔色憔悴如黃病者其倉柱石上置材構其下去地纔三四寸不可容人身而從中出人莫不驚怪良久醒寤曰我常念女事時一女子以書著菊花枝來日公主寄書詞意艷麗心情搖蕩一日宝車迎我先騎四人行數十里至一宮丈夫門迎曰僕公主家令也導我

上殿帳帷綺飾須臾列珍饈公主漸出容貌服飾始不可言也中夜合歡情緒愛纏雖外不辭画則設宴夜亦同寢歎娼甚密遂生一男性聰明貌嬌天

情ノ好ミヲ間ツルニ忍ヒズ。汝能ク富人ノ子ヲシテ百金ヲ以テ我  
ニ餉ラシメヨ……(中略)……『遜齋間覽』

次に『乗合船』巻一之第一「焚不義之女」の本文を挙げる。<sup>(5)</sup>

昔徳州の軍士劉喜といふもの久しく他国に居たりけるに、其妻、  
夫の留守の内に、其辺近き福祐なる者の子と密通す。其後劉喜故  
郷に帰り、此事をもれ聞て、(略)「汝密夫に通ぜしこと、我よく  
是をしれり。吾黙々として辱めを人に受んことも口惜し。又、左  
程に思ひ入れし二人が好みを間ん事も不便なり。此上は汝密夫に  
告、百金を出さして我に送れ……(略)」<sup>F</sup> 実に『遜齋間覽』に  
見へたり

『続集』と『乗合船』の本文を比較しても傍線部分が全て重なり、  
使用語彙や文章展開はほぼ同じであり、『乗合船』独自の表現を入れ  
るようなこともない。そして、決定的な点は『遜齋間覽』という書名  
まで引用されているところである。

このように、二例を見ると、作品の後半部分、つまり朝鮮の話の漢  
籍の利用法の基本は語彙などそのまま利用し、漢文体の文章を柔らか  
く和文に書き改めたというような直接的な利用であるということが分  
かる。しかし、同じ利用法とは限らない例もある。次にその部分を検  
討する。

## 二、『続集』巻八「賀陽良藤」の利用方法について

『乗合船』巻第四の一の話は、これまでとは少々異なる方法で漢籍  
利用をしている。後半部分「色道一遍巴友 附本心試老婆 穴中住居」  
という話は、朝鮮の話として紹介されているものである。少し長い  
引用する。(傍線は筆者による)

朝鮮の学士李東郭、此事を聞いていはく、  
古より古狸の妖をなすこと、あげてかぞへがたし。

明の末、喜宗皇帝の天啓年中、日本にては秀忠大貴君台徳院と申  
奉るの御治世、元和の末、寛永のはじめにあたるべきか。其ころ  
吾朝鮮の安市城に楊巴友といふものあり。中辺將がむすめをめで  
りて愛寵はなはだふか、りしに、三年をも過さずして重びやうに  
おかされ身まかりぬ。巴友なげきかなしむことかぎりなし。それ  
よりやもめずみして年月をおくりけるほどに、もとよりいるをお  
もふこ、ろふか、りしかば、あけくれかほよき女をのみこひしの  
びけるが、いつとなく心神亡然として、折にふれ興にせうじて好  
むところの詩を詠ずるにも、只美女をのみこふる心をいひのべた  
り。

あるとき、巴友いづくへかうせけん、ゆきがたしらずなりぬ。か  
れが氏族はみな豪富にて福祐のものどもなりけるが、このつげを  
き、て巴友が宅にあひあつまり、「いかゞはせん」とあひ議して、  
人を方々にわかちつかはし、たづねもとむるといへども、そのゆ  
きがたをしることなし。

巴友が宅より四五町さつて、大遼といへる大河あり。これは鞆鞆  
国のおかれ、鞆鞆といへるところの西南のかたの高山よりながれ  
いで、みなみにむかふてながれされり。されば、此ながれわか  
れて、遼山の西のかたにては小遼とよび、それよりみなみにては  
遼水ともなづけたり。此河原に大きな杉の木あつて、幾年ふる  
ともしらず。その根は堆ふして、をかのごとし。然るに、三十余  
日ありて、巴友その木の根よりかへり来る。一族家人ども大にお  
どろき是を見るに、顔色憔悴してやめる人のごとし。しばらくあ  
つて本心にふくし語りけるは、「我、つねに美女をおもふこと切  
なり。ある夜、たゞひとりいで、家辺をかなたこなたと逍遙し、  
おほる月にた、ずみて一絶をつくりしが、是よりも沈影楼にあそ  
ばんとおもひ、物さびしくもあゆむところに、叢より其様鬼のご

船』、『(正統)寂照堂谷響集』については『谷響集』、『統集』と表記する。

## 一. 漢籍利用の一例―『剪燈新話』『統集』との関わり

この作品は、前半に日本の国を基盤とした話、後半には朝鮮通信使李東郭を語り手として、朝鮮国を舞台とした話を示し、二つの話で一話が完結している。朝鮮の話として描かれている部分は書名が提示されているが、実は様々な書籍、特に漢籍からの引用であることが判明している。拙稿においても、『乗合船』は『谷響集』『統集』を参照しながら創作された作品が多数を占めていることを述べた。特に顕著な影響を与えているのは『剪燈新話』である。では、どのようにこれらの漢籍を利用しているか、次に「愛卿伝」の文章をあげる。(傍線部分・記号は筆者による。以下同じ。)

羅愛愛、嘉興名娼也。色貌才芸、独歩一時。而又性識通敏、工於詩詞。以是人皆敬而慕之、称为愛卿。佳篇麗什、傳播人口。風流之士、咸修飾以求狎、懵学之輩、自視欠然。郡中名士、嘗以季夏望日会于鴛湖凌虚閣避暑、翫月賦詩。愛卿先成四首、座間皆闕筆。詩曰(中略)……同郡有趙氏子者第六、亦簪纓族。父亡母存、家貲鉅万、納礼聘焉。愛卿入門、婦道甚修、家法甚飭、拓言而発、非礼不行。趙子嬖而重之。未久、趙子有父党为吏部尚書、以書自大都召之、許授以江南一官。趙子欲往則恐貽母妻之憂、不往則又失功名之会。躊躇未決。愛卿謂之曰、妾聞、男子生而桑弧蓬矢、以射四方、丈夫壯而立身揚名、以顯父母。豈可以恩情之篤而誤功名之期乎。君母在堂、温情之奉、甘旨之供、妾任其責有余矣。但年高多病、而君有二万里之行。昔人所謂事主之日多、報親之日少。君宜常以此為念。望太行之孤雲、撫西山之頽日、不可不早帰爾。趙子遂卜日為京都之行、置酒酌別於中堂。酒三行、愛卿請趙子捧

觴為太夫人寿、自製齊天樂一闋、歌以侑之其辞曰……(中略)歌罷、坐中皆垂淚。趙子乘醉解纜而行。(以下略)

この文章に対応する話は『乗合船』巻の第三「再来笑顔 附银杏樹下墓 魂魄聞来契」である。次に本文をあげる。

朝鮮の学士李東郭、此事を聞て云く、  
去事あり。昔大元の末、順宗帝の治世、嘉興県といふ所に羅氏愛卿といへる美女あり。容貌うるはしきのみならず、才芸世に勝れ、性識通敏にして詩をよく作る。去によつて、風流の士皆色をかざつて、狎ん事をもとむ。同郡に趙氏なる者の子あり。元より代々大夫の家にて福祐の者なりしが、愛卿をむかへて妻とす。程なく趙氏が父方の一門に吏部尚書の官に至りし者ありしが、状を以て「趙氏に江南の一官を授くべし」と、都より云ひ送りしかば、趙氏も往ん事をおもへり。然れ共老たる母と妻とのなげきの程を思ひやりて心中決せざりし所に、愛卿諫めけるは、「身を立名を揚て父母の名までも顯はすを以て、人の譽れとする事にて候。何ぞ恩情の篤きを以て功名の期を誤り給ふべき。老母の御事は、自よく仕へ奉らん」といひしかば、趙氏大に悦び、暇乞の酒宴をもふけ、其後舟にのり纜をとひて都にぞ趣きける……(以下略)

この例の傍線の対応部分を見てもわかる通り、「愛卿伝」の本文をほぼそのまま抜粋利用するという利用法である。幾つかの漢語も対応していることがわかる。

では、もう一つの原拠『谷響集』『統集』と『乗合船』の利用関係はどのようになっているか。拙稿でも指摘したが、ここで再度確認する。次に『統集』第十一「劉喜焚妻」の一部をあげる。

德州ノ軍士劉喜氣岸有リ。嘗テ出テ年ヲ経。妻一リノ富人ノ子ト私ニ通ス。(中略)夫婦テ給ムヒテ妻ニ語テ曰ク、汝カ之前事我盡ク之ヲ知ル。吾レ黙トシテ人ニ辱メヲ受ルコト能ハズ。又兩



## 『和漢乗合船』創作過程についての一考察

松村美奈

本稿では浮世草子『和漢乗合船』の創作過程について一考した。作者は創作するにあたり、『剪燈新話』をはじめとし、『(正統)寂照堂谷響集』などの漢籍を多用し、引用のみならず、時には原話を換骨奪胎して全く別の話を構築する。特に、朝鮮通信使往来の時期と出版時期を同じくしていることから、時代性を意識した作品となっており、浮世草子から読本への過渡期に描かれた作品として意義のある作品と考える。

キーワード 朝鮮通信使 浮世草子 上田秋成 剪燈新話

寂照堂谷響集 賀陽良藤 多満寸太礼

## はじめに

『和漢乗合船』は正徳三年正月、落月堂操扨によって書かれた浮世草子作品である。先行研究では、文学史の視点から上田秋成『雨月物語』などにも影響を与え、読本への移行期に現れた作品として注目されてきたことが指摘されている。<sup>(1)</sup> 浮世草子といえば、江島其積らが出版した八文字屋本が多数を占めるが、『和漢乗合船』は、それらとは別の版元から出版されている八文字屋とは別の流れを汲んだ作品の一つである点も注目すべき点ではある。しかし、作品そのものの研究は管見の限り、あまり多くはなく作者についても詳細は不明である。

筆者は先年『和漢乗合船』典拠考<sup>(2)</sup>を上梓し、作品の典拠として『(正統)寂照堂谷響集』が存在することを明らかにした。

本稿は、拙稿で説明し得なかつた課題として、どのような創作過程を経て作品が成立したのかについて考察するものである。原拠となる漢籍をどのように利用しているのか、またその利用方法を概観しながら、創作過程について一考する。以下『和漢乗合船』の題名は『乗合